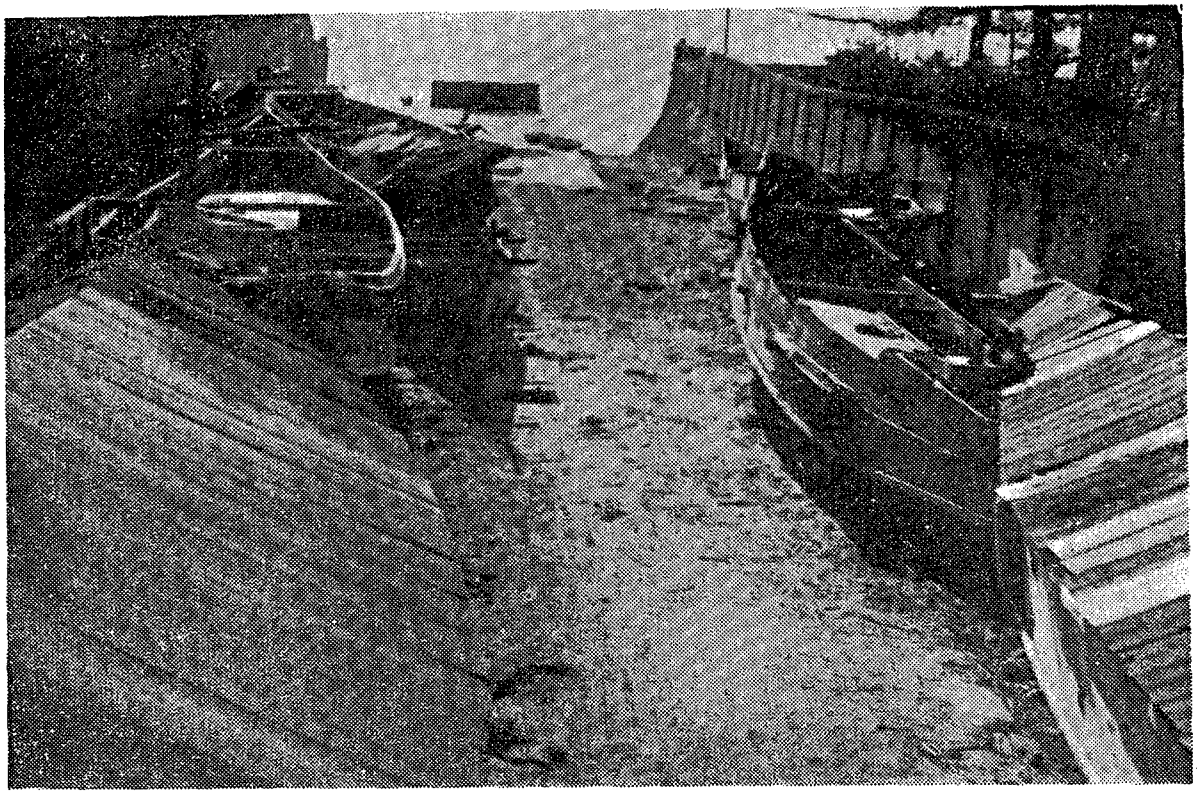
第十九号昭和卅三年三月十五日発行
毎月十五日一回発行　一部　十円
昭和卅二年十月十八日　第三種郵便物認可

拓水

三　月



兵庫県漁業協同組合連合会

漁業協同組合の歌

一
青海原の　彼方より
夜は次第に　明けそめて
此の津彼の浦　鳴り告げる
朝市開く　サイレンに
組合の活動　はじまりぬ

二
四面海なる　日本の
国の富をば　築くべき
重き使命を　それぞれに
になないて立てる　組合の
団結の力　示せ今

三
ああ協同の　旗のもと
一つに結ぶ　組合が
遂げる事業の　数々に
生活豊けく　充ち足りて
漁港の栄え　絶ゆるなし

四
夕べ静かに　陽は沈み
漁火数増す　沖の辺に
働く漁民の　安全を
守るが如く　組合の
窓の灯りは　夜もすがら

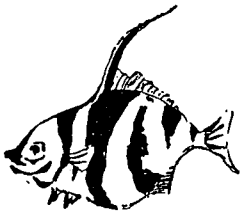
漁業協同組合の歌に
作花英治氏作品入選

全国漁業協同組合連合会では昨年八月漁業協同組合の歌を募集柴山港漁業協同組合専務理事作花英治氏はこれに応募していたが去る二月七日同氏作詞が佳作二篇の中一位に入選した旨発表があった。ここにその全歌詞と作者の感想を紹介する。なお佳作の二位は大分県豊後高田市吳崎漁業協同組合川下忠勇氏の作品である。

只もう嬉しいの一語あるのみ

作花英治

私は只単に二十五年に及ぶ漁協役職員生活の体験を通して頭に浮んだ漁協の姿を、淡々たる気持でまとめたに過ぎない。それが佳作の一つに選ばれたという通知を受けて、全く夢の様な気がする。入選するなど考えてもいなかっただけに、喜びは一しおである。卒直に申して農林大臣の表彰を受けたときよりも嬉しかった。漁協一筋に生きて来た者として正に冥利に尽きる思いである。我が生涯の最良の年とも云えるであろう。



目次

漁業協同組合の歌に
作花英治作品入選……1
訪米旅行こぼれ話
（其ノ一）……2
県水産課長　森沢　基吉
タイ国の漁業技術指導
から帰って（その4）……4
播州室津　中川　三二
細野　稔
但馬における
漁業無線のおいたち……7
対馬暖流　うきね鳥……8

訪米旅行こぼれ話（其の一）

県水産課長　森沢基吉

生鮮食料品の流通加工調査のため約二カ月にわたって米国に旅したが、仕事の内容についてはさきに印刷配布させて頂いた概況報告書を見て頂くこととし、思いつくままに偶感やら旅のこぼれ話を数回にわたって拓水紙上を拝借して御披露することにしたい。

一、日本とアメリカは遠くない

今回の旅行は限られた日程内になるべく多くを見、且つ学ぶことが主眼であったから、旅の殆どを空路によった。随分いろいろの飛行機に乗ったけれども日頃の精進の良いせいか？全旅程真に平穏無事で、空のスリルを味わう機会のなかったのは真に幸であった。アメリカ本土や太平洋のような長大な距離の旅行は時間の節約は言うに及ばず、健康のためにも余分な旅行中の諸経費の軽減のためにも絶対航空機に限るようだ。飛行中は食事もお酒も会社給与だが汽車にのるとそうは参りません。アメリカ国内の鉄道会社が旅客を航空会社に大巾に奪われ、僅に貨物輸送によってのみ採算を維持している現況も成程とうなづかれる。

我々一行は昨年九月二十三日夜八時半羽田空港をとび立ち翌日の夜九時すぎにシアトルに第一歩を印した。

途中アリューシャン群島のシエミアに着陸、食事と給油に約三時間余を割いた外は飛びつづけで実飛行時間は二十時間前後にすぎない。翌日シアトル着と申上げたが日附変更線の関係で到着の日附は出発の日と同じ九月二十三日だからカレンダーの上では銀座で夕食にビールを一杯ひっかけ八時半に故国を離れ、同日同夜の九時にはアメリカ到着ということに相成る次第。あと五年もすればジエット旅客機が就航する見込だが、これだと十時間前後で太平洋を一またぎ出来るから、東京を二十三日の朝に発って二十二日にシアトルやサンフランシスコで魚料理に舌づつみを打っていると云う暦の上の珍現象も起ることになろう。いづれにしてもアメリカと云う国は航空機の発達によって近い距離にひきよせられたものである。

然も今度の旅でつくづく感じたことは距離だけの問題でなく両国の国民感情のひらきが、ぐっと近くなっており、この意味でもアメリカは遠い国でないことをぢかに体験させられた。太平洋戦争は我国にとっては真に不幸な災であったけれども、幸か不幸か敗戦による米軍の進駐という厳たる事実によって、平時ならばとても日本に旅することの出来ない庶民階級が大勢我国に足を印し、我国土、我民情にぢかにふれる機会をあたえられたわけである。この意味で良きにつけ悪しきにつけ米国民の多くが我国を知り、我々日本人も各種の角度で米国人を認識するチャンスを持った。米国各地を旅すると、どんな田舎へ行っても、又どんな食料品の工場、市場を訪れても殆ど例外なく我々一行に片言の日本語まじりでなつかしげに話しかけてくる御仁に御目にかかった。その殆どが兵役によって始めて日本を知った連中である。ミズリー号で第一番に東京湾に乗りこんだという元海軍将校、マックアーサーと一緒に厚木に進駐したと語る元陸軍下士官、大陸に駐留して京都の祇園の○子に首ったけだったという兵隊さんなどその軍歴は真に千差万別乍ら、黄色い我々の顔を見ると日本駐留の良き時代？を思い出して話しかけて来ずには居れない人達が戦後アメリカに非常に増えたことは否めない事実であろう。細部にわたっては偏見も誤解も認識不足もあるのだろうが、庶民の感情としてお互に理屈ぬきの親近感がひしひしと肌に感じられる。国際情勢だの政治的立場だのと云うむつかしい話はおあづけにして両国の大衆同志が親しい友人として仲良くしたいと云う気持が最も純粋の国民感情というものではなかろうか。

ロスアンゼルスの商工会議所で昼食会に招待された席上、議長は一行を歓迎するテーブルスピーチの中で次のように語った。

「航空機の非常なる発達によって、も早米国と日本は遠い国ではなくなった。両国民はお互に隣人である。皆さんも将来度々気軽にアメリカへ来てほしい。我々も亦貴国を訪問してお互に知識や経済の交流をはかりたい」と。

二、日航機のサービスは良いか。

日本を発つ折はノースウエスト機、向うの国内ではアメリカンエアライン、ユナイテッドエアライン、

パンアメリカン、おしまいの太平洋横断家路の旅は日航機と相当多種類の会社の旅客機に搭乗した。一々各社の考科表をここに御披露する気持はないが、一番優秀な機種にのったのはノースウエストの太平洋線、我々に最も心暖まるサービスをして呉れたのはやはり日航機と云う結論を出したい。

ノースウエストは今回日本航空でも購入したダグラスの7C型を以前から使用している。この機は「最後のプロペラ旅客機」と云われるだけあって、速度に於ても航続力においても、装備においても先づ現在の商業航空で最高のもののようである。こういう素晴しいやつに乗っかって居ると、腹をすえているせいもあるが、全く安心で、「若しや?」と云う心配感が全然おこらぬ。とにもかくにも一朝有事の際は先づ全損で分損の希望の持てない空の旅、ゆめオンボロ飛行機にはのる勿れである。7C機の太平洋横断旅行は真に平穏無事、快適そのものであった。機内のサービスは各社とも競争にしのぎをけづっているだけあって、いたれりつくせりである。スチュワデスという職業が如何に激務であるかを再認識させられた。然し乍ら日本人はやはり日本式のサービスや可れんな大和撫子に点があまい。二カ月の旅で飛行機に乗れば必ずつきまとう英語のアナウンスにうんざりして居た我々が帰りの日航機の座席に腰を下した途端、スピーカーから御搭乗の皆様…」と流れて来た日本語に、はや故国に帰ったようなくつろぎを感じたことはあながち淡い感傷だとしてのみ片づけられないものがあった。日本のスチュワード嬢のサービス態度は仲々よろしい。おしぼり、にぎりずし、幕の内弁当、日本酒、に加うるに振袖姿の立ち振舞は故国を遠くはなれた日本人旅行者には勿論のこと、日本を訪れる外国人の心にもつよくアッピールする要素を備えている。服務態度も立派であり、教養も高く且つ親味の溢れるサービスであることは決して他の外国旅客機に比して優るとも劣るものでないことを体験して心強く感じた。日の丸の平和航空路が全世界にのびる日の一日も早からんことを祈りたい。

余談乍ら飛行機にのって楽しみである筈の食事が場合によっては苦しみとなることがある。つまり食べもののサービス過剰がこれだ。飛んで居る間は先づねることと食うこと以外に用事がない。景色などは渡洋飛行だと雲と海と空ばかりで単調この上なく一時間もたてばあきあきして来る。朝、昼、晩の食事は勿論のこと、間食が盛に出るので運動しないのに、口ばかりを動かす始末となる。時間が来ると当方の食慾に関係なく座席の前にデュラルミン製のテーブルを据えつけて目録通りの食事が運ばれる。スチュワーデスのサービスが上手だから食べないと何だか申訳ない様な気持になってつめこまねばならぬ。テーブルを取り除かないと座席から立つことも出来ないから、全く腹のへっていない折は食事のノルマを科せられているようなものである。日本料理なら何とか我慢もしようが、毎回バタくさい奴をこの調子でやられると相当頑丈な胃袋の持主でも白旗を揭げたくなる。羽田を発ってシアトルまでの九月二十三日と云う日は一日に五回も飯を食わされた始末となり、出発早々で体の調子もととのわず、睡眠も不足のスランプ時にこの強制給食をやられてまいった人も我々一行中に数人あったようだ。贅沢なことだが御馳走ぜめの悲哀である。

三、アメリカ料理はまづいと云うが。

多くのアメリカ帰朝の日本人があちらの料理はうくないと云う。然し雑誌や映画で見るあの豪勢な食事がそんな筈があるものかと自分も疑問に思って居た。二カ月の旅をふりかえって見て、どうもやはりアメリカ料理に及第点はつけかねる。勿論何もかもがまづいと云う表現は行きすぎである。新鮮な野菜や数多い果物などは食通の天国であり、ミルクやアイスクリームの優秀なこと、到底我国の比ではない。一寸としたレストランへ行くとアイスクリームの種類は約三十数種類が揃っている。味も仲々よろしいし、量もたっぷりで比較的安価である。

反面おそろしく不味いのが魚と肉類の料理である。舌の上でとろけるような神戸肉に馴染の深い我々にとってアメリカの牛肉に御世辞にも良いとは云えない。鳥肉また然り。魚にいたってはえび、かに、かきを例外としてみんな大味で、料理法もフライにするかステーキにするかのどちらかだから瀬戸内のいきの良いやつをこったつくりで贅沢に、ふんだんに食べている日本人にはおよそがっかりである。

肉類の味が日本人に歓迎されない理由はどこから来ているのだろうか。それは全く食生活の根本的な相

違による生産と流通の過程が問題である。肉類は我々の米穀と同じくアメリカ人にとっては主食である。日本料理や日本の西洋料理における如き副食ではない。従って殆ど毎日肉を常食とするため、健康保持上の理由によって脂肪を極力少くする必要が当然起って来る。牛肉は牛の肥育の段階からなるべく脂の少いものを育成するようあらゆる努力と研究が行われて居るほどだ。もう一つの原因は生産地から消費地までの輸送距離の長大さから獣肉にしても鳥肉にしても、亦魚肉にしても冷凍品や缶詰が圧倒的に多い。ひねりたての鳥すきが普通と心得ている日本人にアメリカの肉料理が全くまづいのは主としてこの点に原因があるように思う。私も方々で相当高い金を払ってビフテキを試みて見たがその固きこと雪駄の如く、一度も日本で安く食えるようなうまいテキにお目にかかることが出来なかった。最高六ドルの奴まで経験して見た。もっと出せば或はうまいのにお目にかかれたかも知れぬがこれ以上は財布が許さなかった次第。

現在アメリカ国民の栄養面に於て肥満症の累増が問題になっている。つまり栄養過多である。特に更年期の淑女たちのこれに対するなやみは美容と健康の両面から深刻であるようだ。面白いことにドラッグストアやレストランのメニュを見ると「栄養のない料理」と銘うったものが堂々？と印刷され掲示されている。ジュースとかオートミールとかを主体として動物性蛋白のない料理らしいが真にアメリカらしいと思う。日本の料理店でこんな広告をしたらどういうことになろうかと想像して苦笑を禁じえなかった。

米人の家庭を訪問して奥さんの心尽しの手料理をよばれる機会にもめぐまれたが、やはり主婦が念を入れて作って呉れる家庭の食事にはレストランやホテルの食堂で味えない素晴しさがある。敢て不評のアメリカ料理のために弁護して置こう。

タイ国の漁業技術指導から帰つて（その4）

タイ国における漁業の概況

はじめに

折角タイ国までやって来たのだから滞在中にこの国の漁業の状況をできるだけ詳しく調査したいと考ていたのであるが、最初に述べたように巾着網の方に精一杯で時間的にも余裕がなく、わずかに出漁中に出くわした現地漁船の操業ぶりと、会社の幹部やタイ国人の漁夫から聞く話などによってする以外に方法はなかった。

編集者の御厚意と、県外出漁協会のたっての御依頼でこれまで三回に亘って続けてきた悪文のしめくくりの意味で、タイ国の漁業概況を書くことにしたのであるが右のような次第で余り自信がない。ごく大雑把なところで許していただきたい。

○漁業者の数

タイ国の人口は一、八〇〇万人に少し足りないそうである。国内で最も重要な産業は農業であるが、魚は米に次いで重要な地位を占め最近のセンサスでは漁業の専業者は約五万人、これに兼業者と内水面の漁業者を含めると、おそらく三百万人位にはなると思われる。

○主として行われる漁業

遠洋漁業は発達しておらず浅海の小規模漁業と、メナム、メクロン、バンバコンの三大河川及び湖水における漁業が全国的に行われている。

海面漁業の主なものは、

定置漁業（ポウ）、……タイランド湾の沿岸一帯に無数に点在している。……が最も重要なもので、このほか、巾着網（タンケー）……推定二五〇統位い……、流刺網、四手網、地びき網それに一本釣漁業が盛んに行われ、又メナム河の川口では小型船によりエビ漕を操業しているのを見受けた。

このうち、非常に活気のあるのは巾着網で、ポウとともにこの国の主幹漁業と見てよいであらう。

とくに我々の関心をひいたのはサララ流網で、相当数の漁船が操業し

ているようであったが、この流網を我々が巾着で苦労したプラトウを獲るのに一度試めしてみることは決して無駄ではないという感じを受けた。

○主なる魚種

海産魚の主なるものはプラトウである、その他は、サメ、イワシ、チヤラン、それにサワラ、タイ類などの魚が多い、又一本釣でたくさん釣れ魚にプラコットというのがあり、これは日本のナマズに似たややグロテスクな代物であった。

○漁　船

全部で何隻位になるか見当がつかないが、巾着網以外の漁船ではほとんど四～五トン以下の小型船で、自動車エンジンのような外国製のガソリンエンジンを付けているのが多いが、巾着網の漁船には最近日本製の焼玉エンヂンやヂーゼルエンジンを使うものが目立つて多くなって来た。

○漁業経営

会社組織の大きな企業体は、我々を招へいしたタイトレイデングカンパニー以外にはないようである。

多くは個人経営であるが、巾着網は勿論、そのほかの規模の大きな漁業は大抵華僑資本が押えている。最近はタイ国人の専業者もかなり増えてきたようだが、それでも華僑が多くこれに次いで安南人、支那系タイ人が重きをかしているが総体的にみて資本力も小さく、技術も幼稚であって、海面漁業よりもむしろ淡水漁業の方が優位を占めている現状である。

○生産と消費

一説によるとタイは仏教国であり、しかも小乗仏教であるため殺生な漁業は行わず、魚も余り喰べないということであるがこれはどうもあやしいタイ国政府は国民の蛋白給源として魚介類の重要なことを認識し、生産及び流通の改善計画をたてて大いにサービスしている。

魚は一般に鮮魚として消費されるより乾魚あるいは塩蔵にされ、インドネシヤ、香港、シンガポール等にも輸出されているようだ。

なんでも年間の産額は二〇万トン以上になり、最盛期には国内で消費しきれないそうであるが、最近は沿岸の各地に製氷冷凍工場がぼつぼつ建設され、又将来は缶詰工場などの建設によって水産物の処理加工も徐々に近代化されようとしている。こうした施設の整備と相俟って、タイ国の水産業は今後ますます発展するものと予想される。

○おわりに

我々が一年間のタイ国滞在から帰国したのは昨年の七月二十九日でした。帰えりは、日航の路線がバンコックまで延びていたので、くつろいだ非常に楽しい空の旅を満喫できたが、いささか南国ボケしたのか、前後四回にわたって載せていただいた雑文も、途切れ勝ちな記憶の糸をたぐりたぐり思い当るままに書きなぐったものでほんとうに読み難らかったものと思います。今になってあれこれ思い出すこともありますが〝書く〟ということは思ったよりしんどいことで、仲々うまくまとまりません。まずはここらで終らしていただこうと思います。

播州室津　中川三二
細野　稔

〝対馬は豊漁か〟

県外出漁の巻

衰退の途をたどりつつある沿岸漁業の積極的な打開策として、すでに七年の才月を送り迎えした県外出漁事業は、昨年、協会の拡大強化を遂行し、海外協力会への加入もすませ、文字どおり全県的な組織を固めて、いつそう力強い歩みを見せてきているが、その出漁事業のなかで、とくに沿岸漁業者から注視され、成果を期待される〝対馬出漁〟の、今年度の成績はいったいどのようであろうか、また今後の見透しはどうなのか、サレバ漫坊もペンを担いで、コトの真相をうかがわんとする次第だ。

漫　坊

春日和のやわらかい陽光が、街路樹の若い淡緑の芽をさすり、この県水産課の四角な窓から部屋のなかへ、おだやかにすべりこんで、あたりを明暗に区切つていた。

ひっきりなしにドアが開閉して、

忙しく人が出入りする。部屋の左側に県外出漁担当の小黒技師、加工担当の臼杵技師、来客の応待につとめている浅海増殖の田寺技師、新農村、市場流通と取り組む山本技師、それに寺尾雇の、生産係のスタッフが机を並べ、多忙な時間をテキパキと処理している。

「やアどうもお待たせして――電話がかかっていたものですから」

もの静かに椅子に腰をおろした生産係長の森本さんは、落ついた口調で

「対馬出漁のこと？」

と、いち早く先手を打つ。漫坊思わず頭を掻いた。

「今年度の成績はいかがですか？」

「漁況はとてもよいようですネ。しかし魚価がいま一つというところがあって、これが心配なのですが」

森本さんは、書棚から出漁者の人達の手紙を取り出してきた。それによると次のようである。

二月十四日附の、鹿児島県枕崎市からきた但馬の浜坂漁協組所属の加藤幸一氏の便りは「――（前略）現在枕崎市に香住船五隻浜坂船二隻が来港致し居ります。――対馬のイカ釣りは、吾々兵庫船団は、他県船に比して皆大漁致して居りますが、何分にもスルメが安くて、収入は期待したようではありませんでした。この点の対策が必要と存じます。」――と、大漁時の価格について知らせてきているが、加藤氏はさらに「海図をたよりにカツオ魚群を求めて枕崎市に船を進めた」模様を記し、なお種ヶ島附近にまでその船足を伸さんとの計画を告げてきている。

一方、内海側の丸山漁協組所属の出漁船は、未だ詳細な報告がないようだが芦ヶ浦の兵庫船団基地からの平岡さん（佐野出身）阪東さん（福良出身）の便りでは、かなりの好漁に恵まれているようである。

× × ×

「……というように折角の好漁に恵まれていながら、魚価の面で問題が残されていますネ」

「今年度の特徴といったものは？」

「それは何といっても、但馬からの出漁船が圧倒的に多くなったことですよ。以前は内海が主体でした」

「というのは、内海漁業者の熱意が足らんということですか？」

「いちがいにはいえませんネ。しかし内海側は、いくぶん粘り強さが少いように見受けられるのは確かですネ。但し平岡さんや阪東さんは例外です。あの人達は、本当にじっくりと腰を下ろして、長い目で拠点をつくりあげようとする気迫がありますから」

「内海側は、県の出漁補助金が打切られてから急に減ったとききましたが」

「そのとおりですよ」

「では、三十三年度で補助といったことの見込はどうですか？」

そこまで話しを進めたとき、まるでいい合わせたように、総務係長で水産課長補佐の相川さんが、こちらに近づいてこられたのである。

――長らく財政課におられて、県財政の、いうなれば県のお台所を熟知されておられるベテラン相川さんは、愛想よくニコリと笑いながら

「三十三年度の予算は、まだハッキリしませんから何とも申上られませんけど〝補助があるから行く〟ということではなくて、もっと本質的に、〝どうしてもやり抜く〟といった精神的な問題がまず大切だと思いますがネ――

どうですか森本さん」

「たしかにそうですね。好成績をムダ使いでパアにする風習もあるようですから」

「そんな所にも、県外出漁の根本的な問題があるとわたしも思うんです」

と、小黒技師は、言葉を強めて、これからの出漁事業の進め方を語るのである。

× × ×

「昨年、芦ヶ浦の宿舎の修理もやりましたし、協会としては懸命に推進に当ってます。とくに嬉しかったのは、韓国にダ捕されていた浜坂からの出漁船のうち、門脇作二さんが去る二月一日に帰ってこられたことです。小黒技師が下関まで迎えに行きましたが」

「いま門脇さんは鳥取の日赤病院に入院しておられますよ、心臓と腸が少し悪いようですしかしまだ宮本二郎さんが残っておられますから」

と、小黒技師は、自分のことのように表情を曇らせるのだった。

× × ×

――県外出漁の前途は、なかなか容易ならぬものがあるといえるだろう。しかし、沿岸漁業の、外側に向って開いている振興策としてこの有望な出漁事業は、あくまでもしっかりした意志と努力に待つほかはなさそうである。

「すでに七年をすぎ、対馬の拠点にも、平岡さん阪東さんが、強固な意志で頑張っておられます。それか

ら但馬の出漁者の人達も、遠く種ケ島まで航跡をつづけておられることは、私達にとってこよなく力強いことです」

最後に森本さんは表情をひきしめながらこういわれたのである。漫坊はペンを走らせるのを止めて、県外出漁の前途を祈らずにはおられなかった――その時、忙しい水産課が、一瞬、じっと静まったように思えたのは漫坊の錯覚であったかもしれない。

但馬における漁業無線のおいたち

漁業における電波の利用は戦後著しく増大し、その利用部門も年々拡大されて、方探、レダー、ロラン、ラジオブイ等新しい電波機器の発達と共に、益々漁船に導入され、操業能率の向上や経営の安定強化のために、大きな役割をはたしていることは誠に慶賀に堪えない次第であります。

然し何と言っても漁業用電波器機の王座は当分無線電信電話にあることは、次の盛況ぶりによりみても間違いない事実と言えます。

即ち、昭和十六年においては、漁船の船舶局数一一〇〇隻、漁業用海岸局二二局であったものが、現在では漁船の船舶局数七千余局、漁業用海岸局一七〇余局に達し我国全無線局の約五〇％を占め、なおかつ年々増加の状態にあり、これがため電波当局では、電波の割当に行き詰りをきたしつつあり、これが解決策として最近SSB方式の採用可否について専門家筋で研究が進められている状況です。ひるがえって漁業界に無線が導入されたのは何時頃かと申しますと、漁業においては明治四十五年農林省漁業指導船速島丸であり、漁業用海岸局では大正十年静岡県清水無線電信局であると記録されています。

では但馬における歴史はどうであるかとたどってみますと、本県の主幹漁業は何と云っても機船底曳網漁業であることは、論ずるまでもありませんが、この漁業と密接不可分の関係を保ちながら今日の普及をみるに至ったものであります。（本漁業の沿革については一応稿がまとまったので折を見て発表したい）即ち大正末期まで沿岸漁場で全盛を極めた底曳漁業も、昭和五・六年には乱獲の兆候を示すようになると共に、経済界の不況と相まって新漁場の開拓が痛感されるようになりました。かくして同七年、県水産試験場指導船但馬丸によって、ソ連沿海州公海漁場が発見開拓されるに至り、爾来同八年より業者船の沿海州出漁が始ったのであります。

何分にも往復一〇〇〇浬にも及ぶ漁場と操業範囲の拡大によって陸船間の連絡、情報の交換等漁業経営を向上せしめるために、どうしても無線施設の必要を痛感して昭和十年三月、香住、口佐津（現柴山港）竹野、港（現津居山港）の四漁業組合が共同して、香住町に陸上局（現在の香住漁業用海岸局）を開設し、続いて船舶局もでき昭和十一年には電信、電話の併設船が一五隻に達し、沿海州出漁の安全操業に大いに寄与した次第であります。

これが但馬における漁業無線の草分であります。その後年々無線施設船は増加し、昭和十九年には二八局に達しましたが、大東亜戦争のため相つぐ徴傭により、昭和二十年の終戦時には十四隻に減少しました。

戦後は海外漁場を失った為もっぱら鳥取、島根県の沖合を主漁場として稼働したことと、保守器材の入手難、インフレ経済等の事情により廃止するものがつぎつぎとでて、同二十六年には僅か五隻を残すのみとなりました。

かような次第で、しばらく低調でありましたが、折しも二十六年十月

組合別＼種別	無線機 50W	無線機 35W	無線機 10W	無線機 VHF	方探	魚探	備考
津居山港	一	五				一七	底曳漁船
柴山港	二	一六	七		一八	二五	〃
香住町	四	二九	二		二五	三五	底曳漁船三〇 巾着漁船二 宮庁船三
浜坂		一				一	巾着漁船
諸寄			八				底曳漁船
居組		一	二	五			〃
計	八三局				四三	七八	

（三二年一二月末香住無線局正会員）

のジェーン台風のため伸生丸が顚覆し、八名の犠牲者を出しました。この不測の事故が動機となって再び復興の気運がたかまり、あたかも韓国東海岸への出漁対策が真剣に考えられていた折でもあったので、一層気運を増長すると共に、一方県に於ても海難防止、漁獲向上の観点から、二十七年、二十八年の二ヶ年間に亘り無線並魚群探知器の施設費に対し一部補助の措置がとられ奨励したので、急激に普及をみるようになりました。

三十二年度末における但馬海区の船舶局は八三局に達し普及の状況は左表の通りであります。最近の傾向として近年沿岸一本釣の漁場が沖合に移行しつつあり、これに伴う海難事故も増えつつありますので、この対策としてモーター漁船に超短波無線を装置したい声も出ており、今後は各層の漁業に導入され一段と漁業経営の安定、海難防止に貢献をするものと考えます。

附　記

香住漁業用海岸局の沿革誌が全国漁業無線協会香住支部より出されていますので御参照下さい。

対馬暖流

うきね島

芦ケ浦

ここは対馬出漁発祥といへる。初年度の岩屋船団初め、丸山の人たちがここでの仕事を開拓したことは、その成果は別として、大きい足跡をのこした点で記録さるべきであろう。

丸山の人々は五年間冬季出漁つづけ、次第に漁獲成績も向上してきたようである。それでも対馬のたい延縄船の水準へはまだ遠いとの事だ。それにつけても地元船が何十年に亘りしかも周年これをやって得た漁期磯場などについての経験の累積がものを云っているのを見逃せないし、一尾十円の白いかを千尾も餌料に使っても、これで三十〆のたいを必ずとるという確信をもって縄を延べる境地に達するまでの歴史があることを忘れてはならぬ。三年や五年の経過を見て軽々に結論を出そうとするの愚を知るべきである。

私が西からやって来て先づ目についたのは意外なこの地の空気である。出漁団の人が裏山から一握りの枯枝を拾って来たのを地元の人からとがめられているのに先づ驚いたのは序の口で、どうも何かにつけて地元とうまく行っていない。どこか考えさせられる所があるのだろうと思った。又そこには最も醇朴をうたはれた小綱の地と東海岸の村との気風のちがいもあるようであった。けれども丸山の人々は往年北洋出漁の体験もあるとかで、進取的気魄にも富み、淡路の漁師には珍しく礼儀正しく柄がよい。随って地元ともうまく融和しているようであった。

延縄基地として宿舎もあるこの地は、われわれから見るといかの芦ケ浦である。奥行一キロ半幅半キロ位の袋状の湾内に入りこむいかの量は大したもので、夜半に突風とまがう潮ざいの音におどろいて起き出てみると、何千といういかが何物かに追はれてのことだろう、家の前の磯の上へ打ち上げられていることもある。この湾内に敷設された定置網には、一冬十万〆から二十万〆のいか漁があり、三割は漁場料として組合を通じて組合員への配当となり、全部のいかを各漁家で加工することにより相当の収入となるいかの村である。

湾の入口は百米位の幅なのでどんな時化にも波が入ってこないから、外海へ出られぬ日は家の人と話をするような所でいかが釣れ一夜に一人千尾も釣ることも珍くない。

冬いか

北海道、シベリアの海が冷えてくると、いかは大群となって長い旅に出る。これが三カ月で対馬海峡までやって来る。夜間は餌を求めて浮上し逆潮に流されることを計算に入れると、昼間は深海をかなりの速力で進まねばならない。その独特の大きな肝臓に蓄へられたエネルギーによって、又特に強靱な筋肉を駆使して、或時はヒレを動かして徐々に進み、或時は胴体をロケットに応用して噴封式推進法によって急速に走る。そしてこの堅い筋肉と大きな肝臓をもたぬ他のいか族の企て及ばぬ遠洋航海をなしとげるのである。

疲れたからといって隊列を離れて休んだり眠ったりすることは許されない。長い旅の途中にはこのいかを大好物として常食にしている、ぶり、まぐろ、かじき、ふかなどという強敵がいつも大口あけて待っている。

それのみか落伍者があると、これらの敵の追蹤を促すことになるので、弱ったやっはいか仲間がよってたかって食ってしまう。まさに狼流の生態である。あはれみだとか遠慮だとかいう神経はここでは通用しない。あくまでドライである。これも自己防衛と種族保存の避け難い手段なのである。

彼等は適温の海を求めて南下北上をやっているのであるが。はからずもこれによって、いわし、きびな、あみなどの食料対象にいつも、恵まれているのである。人間社会の世智辛さを聞いたら、いか族はあざ笑うだろう。

去りゆく魚鮮を指くわえて見送りながら、冬枯だヤレ不漁だと愚痴をこぼしている人間共は、冬眠技術を会得するの境涯を拓くそのときまで、一と先づ海の先輩いかやまぐろに学ぶ心がけがあってよかろう。

霜を加へつ

沿海州北鮮の卓越した季節風は常にNと吹いている。明けても暮れても止むときのない冬の玄海の大うねりの源である。このうねりと大陸からまともに吹きつける夜風とが、内海育ちの人々には苦手なのだ。

「そんな荒海で冬の夜を働くにしては、いか釣り位では稼ぎが細い」という声も無理ではない。ところが但馬や長門の人々にいわせると、

「対馬のいかは陸岸近くで釣れるので海は穏やかで安全であるし、それに冬の閑漁期の漁としては有利である」といって非常に力を入れているのも尤もなことである。

まして打ちかけた水が即座に凍りつく北の海の漁業などにくらべたら、ここの海のありさまなど物の数ではない。若い頃にはこの激しい波風や寒気など自然の暴威の前に身をさらすことに、一種の痛快味をかんじたものだ。手袋の先が破れていると、指が凍傷になって白いローソクのようになる。そんな苦しみの中に却って小気味よさを味わったくらいである。

コンラッドではないが船はボロであるほどおもしろいし、海は荒れるほど張り合いがある。人の出ぬ時化に出漁して抜け駆けの功名をねらうなどは、まさに快心のお家芸であった。

ところが駑馬が老いて猫にもおとる存在となってきたようだ。今までかって知らなかった船酔に似た状態さえも覚えるようになった。風強ければ気おくれがし、波高ければ心憶する。それは無気力になったということもあるが、自分はともかく若い者の命は大切だと思うと、不測の事故や危険が夜の海上の作業に数限りなくつきまとっていることを、あまりによく知っているからである。

大漁のときは夜半頃にはもう五千尾四百〆位のいかが釣れて甲板上は一杯になる。肩も腰もいたい。

「もうやめて帰ろうや」と呼びかけるが若い者は体力がある。返事もせず夢中になって釣っている。その間にも、一秒間一尾という速度で間断なくしぶきを上げていかが船中へ飛びこんでいる。

もう黒島灯台の光も見えず、どうやら二十浬の沖を北東に向って急潮に乗って流れているようだ。北西八米風波も高まった。いよいよ見切り時が来たようだ。

「これ以上釣っても家で干しきれんし風も強いからやめい」引き戦がむつかしいと昔からいはれているように進退の節度よろしきを得なければならぬ。

天気はよいがあまり釣れないというような時は、若いものにまかせておいて、甲板へもぐりこんでこたつに足を温めながら、浮寝鳥としやれていればよい。

「かもじものうきねをすればみなのわたかぐろきかみにつゆはおきつつ」この童心あふるるような万葉の一首をおもしろいと思ったが末尾を「霜を加へつ」と改めたらそのままわが身の上の述懐となる。

一カ月二十八日は出られるというこのいか漁は昼間加工の手伝もせねばならぬから連日徹夜というわけにはゆかぬのである。いくら漁があっても家の工程や天候を考え、徹夜つづきのあとなどは程々に見切りをつける。ところがこれが、いつどこから伝はったものか弟たちの耳にはいったと見えて、妻に向って話したそうだ。

「兄貴は何の取柄もない男だがたった一つ感心したことがある」

「何のことです」

「いかを夜中まで釣ったらいくら漁があってもやめて帰るそうぢやないか、その無慾さは我々の真ねのできぬことや」

しかしこれは必ずしも真相ではないのだが、とにかくこう云ったからとて決してほめたわけではない。そのようなあまい態度だから何をやっても成功せぬのぢやと暗に諷したことばと私は受けとっている。そして

それを辛い忠告としてありがたく聴いておこうと思っている。けれども若いものでも感冒が悪化して肺炎となり、果てはペニシリンショックでやられる寸前まで行った先年のことを思うにつけても寒夜の過労続きは恐ろしいのである。又それほどまでに心身を酷使して、そこはかの利益を得ようと血眼になるのは人間性冒瀆の考え方であると思っている。

ところが困った事に、それ以来妻から大いに不信を買うことになった。漁の見込みがなくて帰ってきても「まで辛抱すれば釣れたかも知れんのに」と来る。なまけもののレッテルを帖られたらこんな手ぬるいことで許されない。今夜は天気が悪いから出られまいと云っても、大したことはないだろうと老いたる駑馬に拍車を入れる。いやはや、えらいことになってきたものだ。

船食虫の攻勢

暖流が岸を洗うため水温が高く船底に食い入る虫の繁殖がひどい油断していたためこの老朽船は残る僅かの厚さを徹底的に食はれてセメント工作によって浸水を防ぐ外なくなってきた。カチカチ山の泥舟よろしくというありさまでは海峡の荒波に乗れる筈もない。船がなくなれば漁師はお手上げだ。しかし網の仕込みに手一杯のとき船を造る余裕は全くない。仏の顔も三度という。無心をする相手もなくなった。残るところは故郷にある家を売って金をつくるより外に道はない。対馬に骨を埋めるつもりの私は、再びこの家に住む事もないのだから、何の役にも立たぬ空家を売り払って船をつくることは唯一最上の手段である。

ところが妻は生活が苦しいほど逃げ腰となり、バラック同然の今の住居の不自由さを味うにつけても、猶更故郷への執着をもり返すようである。柳子が発病して苦痛を訴へ出したのもこの頃である。当時は医者もかからず、またそれほど難病とも思わぬところから手当もおくれて、遂に治療の時機を失し三年も病床に呻吟した後死んでゆくのを見守らねばならなかつたは、私にとって他の何物にも換へて一代の痛恨であった。このせまい家そのものが病室となって、陰惨な空気がとぢこめていた。この中でかっての住居や生活に限りない郷愁とみれんとを捨てきれなかった妻の気持もわからぬことはない。家を売ることに強い反対をとなえた彼女の気分も無理からぬものと思われた。

トコトン行詰ったらこの頑固者も引揚を決意するだろう、とその時を半は恐れ半は期待していた彼女にとっては計画の一部である。

「すべてを失ってもせめてあの家だけは残したい」又それ以前に帰る日があるかないかということを別にして、心の支へとして家だけはあると考えるのが唯一の救いでもあったようだ。

このあわれむべき、そしてみじめな心情を思うとき、ここまで引きずられてきた彼女に、家を売るということはもう云い出せなかった。たとえ腐朽して自然倒壊してもよい、おいておこうと考えた。

さまようやどかり

この頃弟からしきりに「対馬を見切って帰ってきてはどうか」とすすめてきた。

事業がうまくゆかず健康もすぐれぬとあっては、一と先づ引揚げて再起をはかれと来るのは極めてもっともなことだ。けれどもこの好意ある提案に私は従うことができなかった。貧乏ぐらしは板について別段痛痒を感じない。仕事の上ではいたって調達な気分でやって居り環境は淡路などとくらべ物にならぬのびやかなものである。事業の上でも必ず立ち上る時が来ると確く信じている私の心は微動だにしない。

終戦後のさまざまの思ひ出はあまりにも不愉快であり、仕事の面にいたってはその当時よりも更に困難となり、われわれの門は一段とせまくなっている。

とにかく私は今の本土の社会、内海の漁場を游泳してゆくに足る修練と技術をもたない。これに必要とされる狡智と闘志に欠けている。

弟たちの折角の親切も反応なくこの海のドンキホーテを妄想の旅から引きもどすことはできなかった。

そのとき私の連想にうかんだのは有島さんの書いた「やどかり」の話である。不平家で、しかも夢想家である一ぴきのやどかりが自分の家である貝殻にあきたらず、旅に出るのだが、さてどこをさまようて見ても、その注文通りの貝殻があろう筈がない。やがて歩きくたびれて、炎天の干潟の上でカラカラにかわいて死んでゆくという話である。

しかし最後まで苦しみながらも希望を捨てなかったこの小さな生き物は、仕合せであったとおもう。

少くとも作者があわれんでいるほどには不幸でなかっただろう。

われわれは先人の言動にうごかされるのと同じくらいに、野性の人間はもとより小さな生物にさへ共感や示唆を与えられる事が多いものである。

（筆者は淡路島佐野出身現在は対馬西岡の小網に在住）

第三種郵便物認可　　拓　水 19号　　昭和33年3月15日発行

われらの漁民銀行

兵庫県信用漁業協同組合連合会

会　長　島田文治郎

本　所　兵庫県立水産会館内　　直通電話⑥0193
但馬支所　香住町字中浜頭　　香住125

購買品は漁連で

兵庫県内海漁業協同組合連合会

会　長　三浦清太郎

本　部　兵庫県立水産会館内　　直通電話⑤3424—5
明石油槽所　明石市船町　　明石3207
富島油槽所　北淡町富島　　富島　66
仮屋出張所　淡路町仮屋　　仮屋　59

購買品は系統利用

但馬漁業協同組合連合会

会　長　西上重弍

城崎郡香住町香住　　電話香住154

神戸市兵庫区新在家町　兵庫県立水産会館　電話⑤8301(事務所)　電話⑤9563(宿泊所)

発行所　神戸市兵庫区新在家町 123　兵庫県立水産会館内　兵庫県漁業協同組合連合会
発行人　三浦清太郎